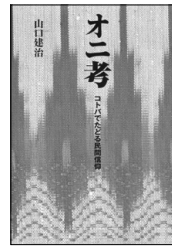


日中民間信仰の地下水脈を照らす

山口建治著
オニ考

コトバでたどる民間信仰

四六判 296頁
辺境社／勁草書房発売
[本体2800円＋税]

金 文京

本書のもっとも核心的な内容は、題名に示されているように、「オニ（鬼）」の語源について、疫病、特に中国南方のそれを意味する「瘟」（ラン）の字音が和語化したとする主張である。しかし私は本書を通読した結果、山口氏のこの主張に同意することはできなかつた。少なくとも山口氏のように「ほとんど確信」（四二頁）するには、残念ながら至らなかつたのである。まず山口氏の主張を整理してみよう。

鬼の語源については、『広辞苑』初版に『「隠（おに）」の意』、『岩波古語辞典』補訂版に『「隠」の古い字音 on に、母音 i を添えた語という』とあるのをはじめ、多くの辞書が「隠」としており、これが通説のようになっていく（ただし疑問を呈する辞書もむろんある）。そしてその根拠は、平安中期、源順（九二一～九八三）の『和（倭）名類聚抄』に、「或説」として

引かれる「於邇者隱音之訛也。鬼物隱而不欲顯形、故以称之」（於邇おになる者は隱の音の訛なり。鬼物は隠れて形を顯すを欲せず、故に以て之を称す）にある。これに対して山口氏は、新井白石の『東雅』、狩谷掖斎『箋注倭名類聚抄』、大槻文彦『大言海』などが、「オニ」という語は上古になく中古に出現したことを認めつつも（『萬葉集』などでは「鬼」は「モノ」と訓まれる）、「隠」語源説に否定的であること、「隠」一字を「鬼」の意味に用いる例が中国にも日本にもないことなどを理由に、これを否定する。また右の「或説」が見える『和名類聚抄』十卷本（人神）の項、二種、二十卷本（鬼）の項、二種の併せて四種のテキストの異同を詳細に比較し、「或説」は後人の付加で、原本にはなかつたものと推定する。そのうえで同じく『和名類聚抄』各本に共通して見える「瘧鬼」の項に、蔡邕『独

断』を引いて「昔顛頊有三子、亡去而為疫鬼。其一者居江水、是為瘴鬼」（昔顛頊に三子あり、亡去して疫鬼と為る。其一は江水に居り、是れ瘴鬼たり）、ついで「和名、衣夜美乃於邇」（和名はエヤミノオニ、十卷真福寺本）、「和名、衣也美乃加美或於邇」（和名はエヤミノカミ或いはオニ、二十卷本）とある点に着目し、さらに『独断』の原文では「瘴鬼」が実は「瘟鬼」となっていることから、「オニ」の語源は「瘟」（オ）と「ヲ」は平安以降混同される）という結論にたどりつくのである。さらにこれを補強する説として、『和名類聚抄』よりやや後の『新撰字鏡』の「鬼」の項に「遠也」とある「遠」も「ヲニ」という語を写したもので、平城京で大祓の儀式が行われた二条大路から出土した木簡に「遠遠遠遠遠遠物物物」とあり、これも「オニ、モノ」を表したものであり、「遠」は実は「瘟」であるとも述べる。

以上の要約だけでは、特に最後の「瘴鬼」は「瘟鬼」、「遠」は「瘟」というあたり、やや唐突と感じられるかもしれないが、これには日本古代の大祓、追儺から現代の節分豆まきに至るまでの厄病駆逐儀礼とその背景にある信仰は、中国古代の驅儺儀礼およびそれに関する後世の道教、仏教などの民間信仰、習俗が、文字を介さず直接、日本に伝来したものであるという山口氏の強い信念が前提となっている。だからたと

え日本の文献に「瘟鬼」、「瘟神」の語が見えなくとも、日本と関係の深い中国南方の疫病を意味する俗字である「瘟」が、耳を通じて直接日本に伝わり「ヲ（オ）ニ」になったということなのである。

ついでこの前提と信念にもとづき、日本の代表的厄払い信仰である御霊信仰の御霊は、「ミタマ」の音読みではなく、中国の東西南北中央の厄神である五帝、五瘟、五鬼、五厲などが伝わったもので「五霊」が原型であること（第一章第三節）、鍾馗信仰と郷儺儀礼の日本への伝播（第二章第一節）、御霊と同義の怨霊もまた「オニリヤウ」で厄神であること（第二節）、日本の厄神の代表格であり、素戔鳴尊と習合した午頭天王、その異名である武塔神もまた中国仏教の五道神の「ゴドウ」という音が日本で別に表記されたものであること（第三、四節）など多方面にわたる彼我の比較が、日中の関連文献および従来の研究成果を博搜しつつ論じられる。

さて次は、右の内容について私の感想を述べる番であるが、その前にひとつ断っておかねばならないことがある。山口氏は本書の中で、ご自分は「宗教学や民俗学の研究者」ではないが、これまでの研究に飽き足らず「無謀を知りつつ」筆を執ったと述べておられる（一〇七頁）。私は山口氏と同業者であるから、本書の内容については私もまた門外漢であって、

冒頭に山口氏の主張に同意しないと書いたからといって、それに対するきちんとした反論、まして代案を期待されては困る。つまり私も無謀の筆を執っているわけで、以下この点を承知のうえで読んでもらいたい。

まず「オニ」は「隠」の字音という通説については、私もあやしいと思う。ただ『和名類聚抄』（山口氏によれば、後人の付加部分）に、「鬼物は隠れて形を顕すを欲せず」とある以上、語源ではなくとも、そういう観念はあつたはずで、その所はもう少し探りを入れてもよかつたのではないかという気がする。また『和名類聚抄』のテキストの異同を詳細に検討し、十巻本が原型、二十巻本は増補本という従来の定説とは異なり、この部分について二十巻本が原書に近い姿と推定するが、その理由の一つは、十巻本のみに見える「周易云、人神曰鬼」が、狩谷椽斎も指摘するように『周易』にはなく、誤りである点にある。しかし十巻本の「人神」の前にも「周易云、天神曰神」、「周易云、地神曰祇」と、同じく『周易』を引くことから考えると、これは『周礼』の「大宗伯之職、掌建邦之天神、人鬼、地示（祇）之礼」を踏まえたもので、「周易」は「周礼」の誤り、二十巻本はそれに気づいて削除したとも考えられる。いずれにせよ「於邇」の語源を「隠」とする「或説」は、十巻本、二十巻本、多少の字句の異同はあるが、どちらにも見

えるので、本書の趣旨からいえば、テキストの先後の問題にこれほど深入りする必要はなかつたのではないかと思える。さらに『新撰字鏡』の「鬼」は「遠也」について、山口氏は「遠」は「ヲニ」の音と考えられたが、これは『周易』「既濟」の『經典釈文』に「鬼方」について「蒼頡篇云、鬼遠也」とあり、少なくとも音だけを写したのではない。前記の平城京木簡と合せて考えれば、「遠」も「オニ」の語源候補の資格はあるだろう。山口氏の「瘟」語源説は魅力的ではあるが、「瘟」はあくまで疫病のことで、疫病を起こす「瘟鬼」ではないところと難点がある。「瘟」だけでは「瘟鬼」の意味にならないという点では、隠れるだけでは「鬼」にならないということと同じではないだろうか。

というわけで、私は山口氏の説にすんなりとは同意できないのであるが、同意できないのは実はこれだけであつて、その他、山口氏がこの結論に至る前提や、その後の推論については、ほぼ全面的に同意し共感するものである。そうでなければ書評など引き受けるはずがない。

山口氏は、このような研究を始められた動機として、次のように述べられる。日本人が和語を漢字で表記する「当て字」にはしばしばこじつけ的な語源が盛り込まれる（たなばた―棚機？ 棚幡？）一方、漢字の訓には実は和語ではなく、

漢字伝来以前に耳から入った漢語が反映し(ゼニー錢「見た目の和語」となる。この両者が混淆した「やまとことば」と漢字のもつれ合い)は、その曖昧さゆえに正統的な漢字音研究からは排除されがちで、その背景にある日中文化交流の真相も不明となるため、これを文化伝播におけるミッシングリングとして探究するというのである。これはまことにもっともな考えであつて、私なりに敷衍すると次のようになる。一般的に中国文化の日本への影響は、主に文字と書籍によりもたらされたという通念が日本の学界にはあり、いわゆる日中比較文学、比較文化研究の大半は文献研究である。しかし人の直接の交流による音やしぐさを媒介とする文化伝播も古代以来、連綿として続いていたに相違なく、文献上は証明できないが、非文字文化の影響は文字文化と同じく重要である。かつ非文字文化の共有があつたればこそ、文字文化もすんなり受容されたと考えられよう。しかし多くの文献研究者は、この点を閑却もしくは無視しているのであつて、そこからたとえれば日本文化はたしかに中国の影響を受けたが、それは表面的なものに過ぎず、日本文化の本質は中国とは異なるといった類の意見が生まれる。山口氏も言及する日本語と漢字の関係は「腐れ縁」、「不可避の他者」と、漢字の受容がまるで迷惑であつたかのような発言も、おそらくここから出て

来るのであるが、私に言わせれば、これはいい大人が、なぜ自分はあるな親に育てられたのだと駄々をこねるのと大差ない。いわんや非文字文化による日中の基層文化には、実は多くの共通点が見られるのであつて、私見によれば、その代表的なものがすなわち山口氏が本書で扱われた疫神をめぐる民間信仰なのである。したがつて私は、日中の疫神信仰に関する山口氏の見解および「御霊」や「午頭天王」などの語源説にも賛同する。ただ「武塔神」については、「五道神」との音通以外に、たとえば托塔天王(毘沙門天)など、もう少し広い範囲で考察してもよかつたのではないかと思える。

山口氏がこのような見解を得られたのは、文献上の知識もさることながら、氏の神奈川大学における同僚で、この方面の先駆的業績『鬼の来た道——中国の仮面と祭り』(玉川大学出版部 一九九七)の著者である廣田律子氏と同道して、一九八〇年代以降、中国の儺戲を実地に見聞されたこと(二二頁)が大きく影響したと見受けられる。実は私も同時期に儺戲の学会にしばしば参加し、山口氏とごいっしょしたことはないが、廣田氏にはお世話になつた。廣田氏の著書は現地調査にもとづく実証的な研究だが、基底には中国の儺文化と日本と同類の民間信仰、芸能の間に共通性があるという実感があると私は見た。この実感は、私が山口、廣田両氏と共有す

るところであり、本書の書評を引き受けた理由もそこにある。山口氏は、「地下水脈のごとき民間文化の交流伝播の道筋を顕在化させようとした」と本書の意図を語るが（二三頁）、実際の地下水脈とは異なり、文化の地下水脈は曖昧で、実証は難しい。慎重な研究者なら近づこうとしないこの曖昧な分野に、あえて踏みこみ、光を当てたところに本書の真価がある。

本書にはまた、同じく山口氏の同僚で、アフリカのモシ族の無文字文化研究で知られる川田順造氏の意見もしばしば引用されている。「声の文化」についての山口氏の見解は、少なからず川田氏の示唆によるものであろう。昨今、学際研究、国際交流が提唱される中、大学では各部門が別々に外部との学際、国際活動に乗り出した結果、肝腎の大学内部での学際がおろそかになった感があるが、この分野の専門家ではない「民間信仰にさほど関心があつたわけではない」（あとがき）山口氏が、このような研究をされたのは、神奈川大学内部の学際的雰囲気から醸し出された幸運な例であろうと推察する。人文学の研究にとつて結論はさほど重要ではない。たとえ結論に疑問がもたれようとも、その前提となる思考方式が斬新で、推論の過程に新たな発見や創意があれば、その研究は十分に価値をもちうる。私は本書の結論には同意できなかつたが、読み進めるそこかしこで多くの啓発、刺激を受け

ることができた。

最後の補章は漢字音のうち唐音の問題を扱い、「ウソ」―「胡説」（杭州音で hu/vy.sueh）、「香具師」―「薬師」、「ヲコ（嗚呼、烏澹）」―「（打）野胡」語源説を提唱、また従来からあつた「傀儡」―「郭秃」、「猿楽」―「散楽」説および「外郎」の歴史的背景について考察する。「ウソ」の語源は「胡説」については、ただちに「ウッソ」とは言わないが、現段階では保留としたい。その他の説については賛同する。鎌倉時代に唐人の薬売り、芸人の放浪集団があつたという推測についても、私は氏とともにその存在を信じるものである。

山口氏は本年、神奈川大学を定年退職される由、今後とも退きて休まず、ますます「無謀な」探索にはげまれ、われわれを驚かせ、また楽しませてくれる新説の発表を期待したい。

（きん・ぶんきょう 鶴見大学）